

持続可能な低炭素社会とライフスタイルの転換について考える ～e-Learningによる国際ネットワーク・自給自足の体験学習を通じて～

中出 慎佑

甲南大学文学部人間科学科 3 回生



(スライド2)

本日は、一学生の立場から低炭素社会の実現のための持続可能なライフスタイルについて、講義を通じて考えていることや、実感したこと、また自給自足生活の体験学習、温暖化防止に向けて自分に取り組んでいることについて、お話したいと思います。



(スライド3)

本日の教材検討会においてアル・ゴア元副大統領の「不都合な真実」を見ました。その中で、私が特にショックを受けたことは、英国の科学顧問であるデイビッド・キングが2004年にベルリンの会議で述べた「世界地図を描き直さなくてはならなくなるだろう」という言葉です。地球温暖化による気候変動やその影響によって、海面が5～6メートルも上昇して、多数の都市が水に沈み対多数の難民が出ることを知りました。海面が、5～6メートル上昇すると世界中が、もともと海拔の低いオランダのようになるのかもしれない。

(スライド4)

海拔が低く昔から海との付き合いが長いオランダでは、すでに建築家が「水に浮かぶ家」を設計するというコンペを始めているようです。私たちは、近い将来大地を離れ、海に浮かぶ優雅な家で生活しているかもしれません。また、世界の都心部では、道路が水に浸かり、船が主な交通の手段となってイタリアのベネツィアのようになるかもしれません。この映画によると地球温暖化の影響は、海面上昇だけではなく、気候変動によるハリケーンの大規模化や新たな病気の拡大など様々な問題を引き起こすことが分かっています。これらの事実から、低炭素社会の実現は、早急に取り組むべき課題だと思いました。



(スライド5)

本年度、甲南大学文学部の専門科目であり、谷口先生がご担当されている「国内・国際環境教育ネットワーク」を受けてきました。この講義は、グローバルな視野から海外の環境情報や環境教育の現状について知るために、TV 会議システムを利用し、プラナコーン＝ラジャバト大学(タイ)、環境省、国土交通省、林野庁、大阪府等と甲南大学を結び、リアルタイムの e-Learning(遠隔授業)を行うものです。

(スライド6)

この講義の中で、プラナコーン＝ラジャバト大学・環境教育センターの副センター長チナタ＝ナガシンハー先生が、タイにおける農水産業とバンコク都心部における車による CO₂排出などが温暖化につながるという講義をしてくださいました。また、CO₂を吸収する森林であるマングローブ林の伐採と関わりの深いタイのエビ養殖について、詳しく話して下さったことが印象に残っています。



(スライド7)

タイでは、マングローブ林を伐採してエビの養殖場を作っています。この養殖場は、本来小さな家族経営的な規模で営まれてきましたが、近年は大企業的な経営に変わり、大規模な森林伐採による開発が行なわれています。マングローブ林は、入り組んだ根を持ち、海からの風や波による土壌の流出を緩衝しています。また、マングローブ林は、生物多様性を育む絶好の場となっています。エビ養殖場の開発のために、沿岸部ではマングローブ林が伐採され、その湿地帯に棲息する生物の多様性が失われています。他方、内陸部でもエビの養殖が出来るように、養殖場が作られています。しかし、内陸部の養殖場は、海水を汲み上げるために塩害が生じています。その結果、農作物が育たない土地になるという事態が起こっています。私たちが何気なく食べている身近なエビが、タイの自然環境の破壊に結びついていると感じ、ショックを受けました。

(スライド8)

私は、実際にタイに行ったことがありませんが、TV 会議システムのネットワークによって、リアルタイムに国境を越えて繋がっていることを実感できました。

この講義を通じて、先進国に住む私たちが、途上国の自然破壊と共に、CO₂ の排出に大きく加担していることを実感しました。



(スライド9)

私たちは実際、快適な消費生活を送っています。しかし、それは過剰な消費生活であり、欲望に対して不必要なまでの選択肢が広がっているようにも思えます。また、過剰な消費生活を示す映

像として、宇宙から見た日本の映像がありました。日本は、夜になると電気の光によって三日月形に浮かび上がっています。この映像を見て、私たちは日常生活の中で、エネルギーを使っているという意識がないまま、膨大なエネルギーを消費していることに気がつきました。現代の生活で当たり前になっている電気や水、ガスについて、見直してみる必要があるように感じます。

(スライド10)

私の所属する谷口ゼミでは、日常生活において、何が無駄なのか、何が必要なのかということを感じるために、自給自足生活の体験学習を 2003 年から毎年行っています。省資源、省エネルギーの生活することは、多少なりとも低炭素社会の実現に、つながるのではないかと思います。



(スライド11)

この体験学習は、神戸市西区の広野にある甲南大学環境教育野外施設において、必要最低限の持ち物で時計や携帯電話を持ち込むことなく、日の出、日の入りのリズムで生活するものです。

(スライド12)

食事には、無農薬、有機農法で育てた野菜と昨年度収穫したもち米を使用します。現代生活から一歩はなれた生活や共同生活をする中で、人と人との関わりあいの大切さを感じ、現代のライフスタイルを見直すことを目標としています。したがって、持続可能な循環型社会とその生活の原体験を主旨としています。



(スライド13)

私は、本年度この体験学習に参加しましたが、今年は台風の影響もあり、8月4日から3泊4日

の実施になりました。この体験を通して実感したことは、飲み水が本当に有難いものだったということ、太陽の光を頼りに生活をすると、普段とは食事の時間も起床、就寝時間も全く異なる生活になることを感じました。

(スライド14)

自給自足生活の体験学習の間は、普段食べる量よりも、本当はもっと少ない量でも体が維持されることに気がつき、谷口先生がよく言われているように「人間の等身大の欲求」に従ったライフスタイルの必要性を実感し、現代の大量消費社会のライフスタイルを見直す機会になりました。

自給自足の体験学習を終えた後、体調に変化がおきていることに気が付きました。それは、朝7時になると勝手に目が覚めるということです。たったの3日間ですが、日の出にあわせて起きていたので、自然のリズムとバイオリズムが同調したのではないのでしょうか。朝、目覚めの悪い私にとって、これは驚きの変化でした。不規則な現代の生活が、いかに自然のサイクルと分離しているかを、身をもって体験しました。自給自足の実感が、日常生活が本当に便利だということと同時に、現代のエネルギー消費が過剰なものだという実感にもつながりました。



(スライド15)

これらの講義や体験活動での経験を日常生活に生かそうと思い、実際の行動にいくつか移しています。私は、50cc の原付に乗っていますが、アイドリング・ストップを徹底するようになりました。自宅では、テーブルタップで電気製品の待機電力を減らしています。また私は、アルバイトをしていますが、職場の近くのコンビニをよく利用しており、そこでの包装、割り箸を毎回断るようになっています。アルバイト先では、私の提案で働く人全員のマイ箸を店長が買ってくれ、事務所においてくれました。原付のアイドリング・ストップにしても、過剰包装や割り箸を断ることにしても、それらの態度は、環境意識があるという意思を表明するという点で重要だと思います。

個々人がライフスタイルを見つめなおすことから、持続可能な低炭素社会の実現を目指すことができるのではないかと思います。